

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究抄録(2022.4)令和2・3年度:

≡ ⊥ √

— ⊥ ≈ TM ≡ —

睡眠障害を認めた脳卒中急性期患者の傾向についての実態調査

旭川医科大学病院 10階東ナースステーション

○下条奈々 庄司実生 鈴川愛理花 山田真愛

キーワード：脳卒中 急性期 睡眠障害

I. 目的

脳卒中急性期の患者の睡眠障害の傾向を明らかにする。

II. 方法

1. 調査期間と調査対象

A病棟に2019年4月～2020年3月に入院した脳卒中患者で自宅退院もしくは転院に至った122名。

2. 除外基準

Japan Coma Scale10以上、脳卒中の既往がある患者、精神疾患や睡眠障害の診断がある、もしくは抗精神病薬や睡眠導入剤を内服していた患者、病状の悪化で合併症や他の疾患を併発した患者は除外した。

3. 調査・分析方法

対象者の看護記録、経過表から、夜間の睡眠障害に関する記録が記載されている者、睡眠薬を使用した者を睡眠障害あり群、それ以外は睡眠障害なし群の2群に分け、それぞれの対象について、年齢、性別、手術（開頭手術、血管内手術）、麻痺、疼痛の有無、離床までの日数、入院時のドレーン・カテーテルの有無を調査項目として抽出し、比較した。離床日数は入院してから初めて端坐位をとった日までの日数とした。なお、今回の研究ではドレーン・カテーテルに関しては、活動に大きく制限が生じる、もしくは制限や留置による不快感が強いと考えられる尿道留置カテーテル、脳室ドレーン、脳槽ドレーン、腰椎ドレーン、SBドレーン、中心静脈カテーテルが入院日に挿入されていれば「あり」、挿入されていなければ「なし」とする。データ分析はIBM SPSS Statistics27を用い、Mann-WhitneyのU検定及びカイ二乗検定を行い、 $p < 0.05$ を統計学的有意差ありとした。

III. 倫理的配慮

本研究は所属する施設の倫理審査委員会からの承認を得た。データを取扱う際は、個人情報保護に十分配慮し、特定の個人を識別することができないよう、対象患者に研究用の番号を付与

し対応表を作成した。

IV. 結果

対象者122名中、除外基準に該当しない53名を分析対象とし、睡眠障害あり群は18名、睡眠障害なし群は35名であった。

①年齢：平均年齢は睡眠障害あり群では65.78歳、睡眠障害なし群では66.66歳であり有意差は認めなかった。

②性別：睡眠障害あり群では男性8名と女性10名、睡眠障害なし群では男性18名と女性17名であり、有意差は認めなかった。

③手術の有無：睡眠障害あり群では「あり」6名と「なし」12名、睡眠障害なし群では「あり」8名と「なし」27名であり、有意差は認めなかった。

④麻痺の有無：睡眠障害あり群では「あり」5名と「なし」13名、睡眠障害なし群では「あり」6名と「なし」29名であり、有意差は認めなかった。

⑤疼痛の有無：睡眠障害あり群では「あり」7名と「なし」11名、睡眠障害なし群では「あり」9名と「なし」26名であり、有意差は認めなかった。

⑥離床までの日数：平均日数は睡眠障害あり群では4.89日、睡眠障害なし群では3.23日であり有意差は認めなかった。

⑦入院時のドレーン・カテーテルの有無：睡眠障害あり群では「あり」15名と「なし」3名、睡眠障害なし群では「あり」13名と「なし」22名であり、睡眠障害あり群では有意にドレーン・カテーテル類の留置が多かった。

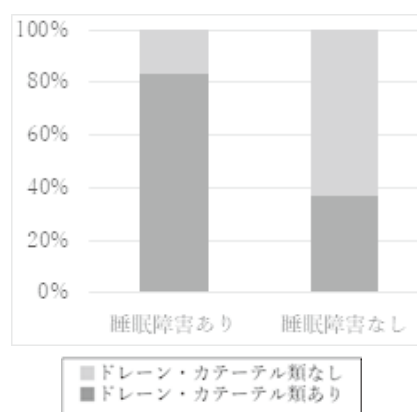


図1 入院時のドレーン・カテーテルの有無

V. 考察

睡眠障害の有無に関して、入院時のドレーン・カテーテル類の有無で有意差を認めたが一方で、重症患者の指標と思われた手術の有無で有意差が生じなかった。よって、睡眠障害に対しては、手術による侵襲の影響よりも、ドレーン・カテーテル類の留置そのものや、留置が必要な患者をとりまく状況自体が睡眠に影響を与えていると考える。

ドレーン・カテーテル類が留置されている患者は、重症室での管理が必要となる場合が多い。重症室は観察をしやすくするためにナースステーションから近く、話し声や医療機器の音といった騒音がある、照度が高いといった環境の特徴がある。このような集中治療の環境において、騒音、空調、ベッド上の蛍光灯の順で患者は不快と感じている¹⁾ことが明らかになっており、入眠を促進するためには病室における医療機器の音量の調整、不要な機器の整理、カーテンやドアで物音や光を遮るといった環境調整が重要であると示唆された。また、意識状態や神経学的所見の確認のため、患者が睡眠中であっても起こして観察する必要があると考える。脳卒中においては夜間のバイタルサイン測定は避けられないが、極力必要な処置を一度に行い訪室回数を減らすことでまとまった睡眠時間を確保することが可能と考える。さらに、ドレーン・カテーテル類といった人工物留置による違和感が睡眠に影響を与えることが考えられる。このことは、疼痛の有無で有意差はなかったことから、疼痛よりも違和感や不快感が睡眠に大きく影響すると思われる。

そしてさらに、脳室、脳槽、腰椎ドレーンの管理では頭部挙上制限があり、体動が制限される。患者の意識状態によっては自己抜去を予防するために抑制を行う場合もあり、行動の制限は精神的、身体的苦痛が生じると考える。今回は抑制の有無について調査は行っていないが、抑制に

より身体的・精神的なストレス反応がみられる²⁾ことが明らかとなっており、抑制が睡眠障害に影響すると思われる。

また、ドレーン類留置中は離床時クランプを要するため長時間の離床が困難であること、膀胱留置カテーテル留置により排泄機会が減少することから、臥床時間が長くなる傾向があると考えられる。日中に離床し活動量が増加させることが睡眠改善に効果がある³⁾と述べており、早期離床だけではなく、離床時間を多くとることで夜間の入眠を促すことができると考える。さらに、脳卒中患者は見当識障害が生じることも多く、昼夜の認識が曖昧になることで睡眠覚醒リズムが崩れると考える。そのため、日中の活動が刺激となり昼夜の認識に働きかけることで昼夜逆転の予防につながると考える。本研究では、離床開始日の調査であったが、今後は日々の離床時間を調査することでより有効な睡眠障害予防に関する介入方法が明らかになると考える。

VI. 結論

脳卒中急性期では、入院時にドレーン・カテーテル類が留置されている患者が睡眠障害に至りやすい傾向にある。そのような患者に対し、睡眠障害を予防するために日中の活動を促す、入眠しやすい環境を整えるといった介入を早期に行うことで、入院中の生活リズムを保ち、身体的・精神的苦痛の軽減を図ることができると考える。

引用文献

- 1) 大貫登志子、山岸由紀子他：ICUにおける音環境、看護展望、23(9)、1059-1067、1998
- 2) 綱木政江、藤澤怜子、両上肢の身体拘束(抑制)によるストレス反応の検証-抑制帯とミトン型手袋の比較-：第49回日本看護学会論文集急性期看護、206-209、2019
- 3) 素野由夏：高齢者に対するより良い睡眠への看護介入～活動量増加による睡眠改善を目指して～、福岡赤十字看護研究会集録、54(35)、28-31、2016

睡眠障害を認めた 脳卒中急性期患者の 傾向についての実態調査

旭川医科大学病院

下条 奈々

庄司 実生 鈴川 愛理花 山田 真愛

資金源・利益相反に関する状況

- ・本研究の実際に際しては特に資金を必要としない。
- ・本研究は企業や団体とのかかわりはなく開示すべき利益相反事項はない。

はじめに

- ・脳卒中患者は、疾患による症状や環境要因などから**睡眠が阻害されやすい**。
- ・実際に、睡眠障害を認め**日中の活動が妨げられる患者を経験した**。
- ・**睡眠障害を認める患者の傾向**について明らかにすることで、睡眠障害に対するより効果的な介入につながると考えた。

目的

- ・睡眠障害を認めた脳卒中急性期患者の傾向を明らかにする

方法

【調査期間・対象】

A病棟に2019年4月～2020年3月に入院した脳卒中患者で自宅退院もしくは転院に至った122名

【除外基準】

- ・Japan Coma Scale10以上 ・脳卒中の既往がある
- ・精神疾患や睡眠障害の診断がある ・病状の悪化で合併症や他の疾患を併発した
- ・入院前から抗精神病薬や睡眠導入剤を内服していた

除外基準に該当しなかった対象者を**睡眠障害に関する記録**
の有無と**睡眠導入剤の使用歴**の有無から
睡眠障害あり群・なし群に分類

方法 一調査・分析方法一

以下の調査項目について睡眠障害あり群・なし群を比較

【調査項目】

①年齢 ②性別 ③開頭手術・血管内手術の有無 ④麻痺の有無 ⑤疼痛の有無
⑥離床までの日数 ⑦入院時のドレーン・カテーテル類の有無

膀胱留置カテーテル 脳室ドレーン 脳槽ドレーン 腰椎ドレーン
SBドレーン 中心静脈カテーテル

【データ分析】

- IBM SPSS Statistics27を使用
- Mann-WhitneyのU検定及びカイ二乗検定を行い、 $p < 0.05$ を統計学的有意差ありとした

倫理的配慮

- 所属する施設の倫理審査委員会からの承認を得た
- データを取扱う際は、個人情報保護に十分配慮し、特定の個人を識別することができないよう、対象患者に研究用の番号を付与し対応表を作成した。

結果

- 対象者122名中、除外基準より**53名**が分析対象となった
- 睡眠障害あり群は**18名**、睡眠障害なし群は**35名**であった

【有意差を認めた調査項目】

調査項目	P値
入院時のドレーン・カテーテル類の有無	0.001

【有意差を認めなかった調査項目】

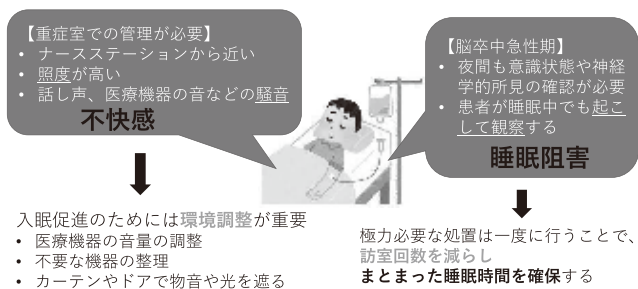
調査項目	P値
年齢	0.799
性別	0.702
手術の有無	0.412
麻痺の有無	0.365
疼痛の有無	0.322
離床までの日数	0.132

考察

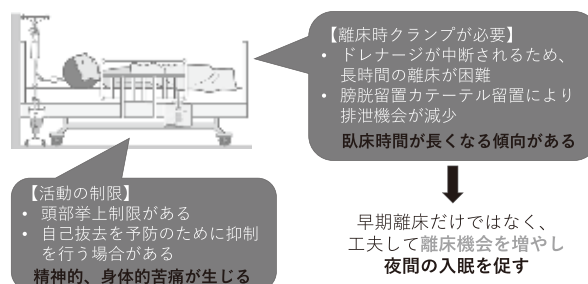
- 入院時のドレーン・カテーテル類の有無で有意差を認めた

手術による侵襲の影響よりも
ドレーン・カテーテル類の留置そのもの、
留置が必要な患者をとりまく状況自体が
睡眠に影響を与えている

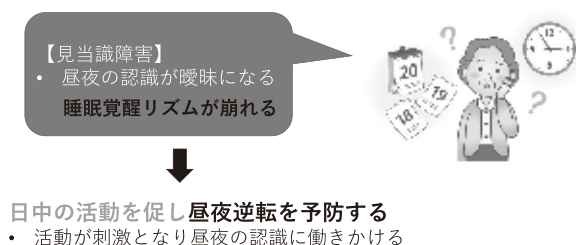
考察 ―ドレーン・カテーテル類の留置―



考察 ―脳室・脳槽・腰椎ドレーン管理―



考察 ―見当識障害と離床―



結論

- ・脳卒中急性期では、入院時にドレーン・カテーテル類が留置されている患者が睡眠障害に至りやすい傾向にある
- ・そのような患者に対し、睡眠障害を予防するために日中の活動を促す、入眠しやすい環境を整えるといった介入を早期に行うことで、入院中の生活リズムを保ち、身体的・精神的苦痛の軽減を図ることができる